

若冲ワークショップ第3回「木版画」2013年10月19日（土）
美術出版株式会社 芸艸堂 代表取締役社長 山田博隆さん

伊藤若冲の作品といえば、「鶏の図」など色鮮やかな作品をイメージされる方も多いかもしれませんが、実は木版の技術を使った作品も残っています。今回は、明治創業の木版画の版元芸艸堂の山田さんに木版画と若冲作品についてお話を伺います。

芸艸堂について

弊社は、明治24（1891）年京都で創業した美術書の出版社であり木版画の版元です。芸術の「芸」と「草」の旧字体「艸」で「うんそうどう」と読みますが、本来芸は「うん」と読みました。やがて「うん」という読みが無くなり芸術の「藝」の略字となったのです。これは芸香（ウンコウ）という草の名前です。洋名はヘンルウダという柑橘系の香りのする草です。当時は、紙を食べる紙魚（シミ）という虫をよけるために栞として使われていました。和紙など紙を扱う会社であることからこの草の名前を明治・大正期の文人画家・儒学者の富岡鉄斎(1837-1924)さんに命名してもらいました。



版元の仕事

版元の仕事は、本の企画、画家の選定、原稿依頼、製版、印刷、製本までをコーディネートする仕事です。製版は、現在は機械でできますが、昔は、画工・筆耕・彫師・摺師達が作業を分担し行っていました。京都は西陣染色関係、京漆器、仏具、陶器や着物など様々な伝統工芸品の集積地であるため、製品デザインに利用する図案が多く求められていました。弊社はそのような図案書（デザイン書）・美術書を出版していました。

明治期のカラー印刷というと木版印刷が主流であり、他社も数々の図案本を出版し、お互い競争しながら新しい図案や、新しい図案家（デザイナー）を発掘し出版していました。やがて機械印刷が普及し、多くの出版社が木版印刷から機械印刷へ移行してゆきます。

そんな流れの中、弊社の得意先は特化されていた（発色の良い高品質のカラー印刷を必要とする図案家達）こともあり、木版印刷での出版を続けることができました。当時は機械印刷よりも木版印刷の方が色の発色が良く、小部数の発行が可能であったため、木版技術が継承されたのです。同時に木版印刷の出版を廃業された版元から版木を求版し、著作権が芸艸堂に数多く移りました。その中に江戸期から続く葛飾北斎「北斎漫画」や中村芳中「光琳画譜」、そして若冲が描いた草花集「若冲画譜」「若冲画帖」などがありました。

画家の作品を木版画に

図案参考にするテーマとして雛形や新しく琳派をモチーフに意匠した図案集（神坂雪佳）、有名画家の作品集などが出版され、その中で京都の画家である若冲の作品が図案本の一つとして出版される事は当然の流れでした。

人気があった江戸時代の画家・工芸家の尾形光琳（1658-1716）の絵を図案化した木版本を発行したり、時代が進み、海外のアールヌーボーの流行が日本でも広がり、お客様からアールヌーボー調のデザインを要求されるようになれば、図案家に依頼して原稿を作っていました。京都画壇の日本画の作品集が着物に転用されることも多く竹内栖鳳（1864-1942）や伊藤若冲の作品もありました。若冲は京都では当時から馴染みのある画家で、デザイン書という見地から彼の作品も図案本として出版していました。

木版摺りの出版

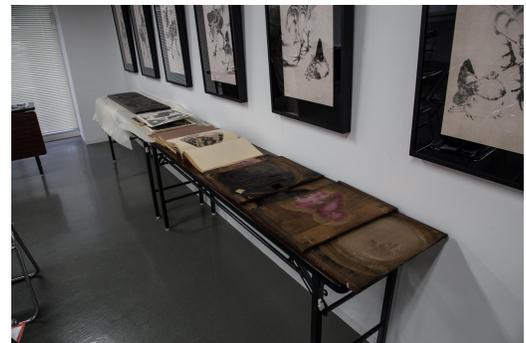
デザイン書、着物の図案などを木版印刷で制作する場合は、色ごとに版木を作り、版を重ねて摺り上げます。そのため、版木蔵と呼ばれる膨大な数の版木をストックする場所が必要になります。（出版社の中には版木のストックを持つことができず廃棄していくところもありました。）

紙は昔も今も福井県の越前から仕入れています。弊社が紙を仕入れている紙漉きの職人（人間国宝）さんは、今は木版画用の手漉きの紙を専門に漉いておられます。見た目は同じでも、強度や需要に合わせて和紙の原料である楮（こうぞ）の配合を変えながら木版画に適した強い紙を作られています。

原稿ができると彫師が絵に合わせて板を必要枚数彫り、次に摺師が原稿通りの色を摺り上げ、さらに経師が手製本します。京都にはお寺などがある関係で、手作業で製本をする職人さんが今も現役でお仕事をされています。当時も現在も図案家やデザイナーはこの図版本を参照しアレンジして新しいデザインを着物や器に作りました。

芸艸堂の若冲の出版物は上記のようにデザイン書という見地から木版画にして出版していました。若冲が版画技術を用いて作品を残した事と目的が違ったのです。

次に若冲の版画作品と芸艸堂の若冲版画出版物について説明して行きます。



拓版画（石摺りや正面摺りともいう）

若冲は 52 歳から 56 歳までの間に拓版画を作っています。拓版画は紙の凹凸や皺がよって微妙な立体感が出る版画技術です。メモ用紙を鉛筆でこすると筆圧でへこんだ部分が白く浮き出てくるのをイメージしていただくと解り易いかもかもしれません。



●資料『乗興舟』明和 4 年

伏見から大阪までの淀川下りの図。詩：梅荘頭常

（ばいそうけんじょう） 風景：伊藤若冲

●資料『玄圃瑤華』（ゲンポヨウカ）明和5年

花卉蔬菜（かきそうさい）48 図からなる。詩：梅莊頭常、絵：伊藤若冲

拓版の技術を使った非常に珍しいものです。私家版としてごく小部数が出版され、一般販売はされませんでした。現在、日本にほとんど残っておらず、研究も進んでいません。この作品を制作するにあたり拓版という手間のかかる方法が選ばれた理由は不明です。江戸時代の絵画の手本は中国が主流でした。拓版も中国から来た印刷技術です。若冲は中国絵画も非常に勉強していたといわれ、拓版技術も応用したのかもしれませんが。

●資料『花鳥版画』明和8年

『花鳥版画』も残されています。現在6種類のみが知られています。これも一見、普通の版画に見えますが、さまざまな技術が合わさっており、背景の墨のところは木版画で摺られ、鳥や葉の部分は当時の染色技術の一つ合羽（かつぱ）摺りとよばれる型染めで摺られています。版画だと凸版で板を浮き彫りにしますが、合羽摺りは紙を切り抜いた型紙の上に乗せ、絵の具をつけたタンポでこすっていきます。染色技法としては、当時は一般的でした。若冲の周りには京都の染色技法が沢山あり、身近に職人さんがいたのでしょうか。理由は定かではありませんが、このような珍しい作品も作られています。

版元が版画を販売用に摺る場合は、1枚だけ版画を作るといふこといたしません。数人の職人達（絵師、彫師、摺師）が分業して1回で100枚くらい摺るものです。それなのに、この画はほとんど世に出てくることはありません。現在、平木浮世絵財団が1セットを所蔵されていますが、他からは確認されていません。

合羽摺りの作品はほとんど出回りませんが明治期に復刻された木版画の作品はよく古書店やオークションで見かけます。というのも、明治時代になると木版画は海外に輸出されるようになり、同時に海外の版元が日本に注文に来るようになります。海外の販売店が日本の版元に、「こういう絵を版画にしてほしい」と依頼をして、それを受けて東京や京都の版元がこの絵を元に新しく版画を作っており、かなりの枚数が摺られていたようです。とはいえ、海外向けに摺られたものであろうということしか分かっておらず、謎の多い版画です。

若冲は自ら版画を摺っていた？

拓版本の奥付に米庵鐫蔵（せんぞう）とあります。鐫蔵は彫り・版木を所蔵するという意味で、制作を若冲がしたという意味です。研究者の中には、「若冲は絵も描き板も彫り拓版摺りもした。」という人もいますが、版元として意見をいえば、分業していたと思います。版画は通常分業で、絵師、彫師、摺師とそれぞれ技術が違い、いくら若冲が繊細な絵を描き器用だとしても版画の全工程を1人で行っていたとは考えにくいのです。



芸艸堂の若冲作品

●『若冲画帖』

『玄圃瑤華』と『素絢帖（そけんちょう）』を合本にして『若冲画帖』として出版しています。明治期に自社で発行したのですが奥付に発行日の記載が無く、正確な発行日はわかっていません。弊社の他の版本にはいろいろな版元から求版したものがあり、この『若冲画帖』に関しては求版した記録が見当たらない。昔から店に居る者に聞くと、弊社が発行する前に別版の『若冲画帖』を見たことがあると言うので、おそらく別の版元さんが作られた版木を弊社が買い取ったと推測されます。明治後期から大正期にかけて発行しています。真っ黒の墨一色のものは戦前迄のもので、『若冲画帖』は、江戸時代に作られたものと同じように真っ黒です。ただ違う点は、原本は梅莊顕常の詩が中心の本でしたが、明治期にデザイン本として出版したときには詩は一部カットされてしまいました。あくまでも絵を見もらうために作ったものです。技法は立体的に表現できるので当時と同じ拓版摺りで再現しています。しかし拓版画の技術は廃れてきています。戦後にもう一度再版していますが、色を見るとまったく墨の黒が出ていません。最近も、再現しようと新しい摺師さんに依頼していますがなかなかきれいに摺り上らないのが現状です。江戸時代に若冲がなぜここまで苦労して黒で再現したのか、当時は拓版摺りが容易だったのか、再現してみても謎の多い本です。

●『若冲画譜』

『若冲画譜』の原画はもともと石峰寺観音堂にあった天井画で、発行時は信行寺に移っていました。初版は明治23年京都の近藤徳太郎（1856-1920）さんが編集して当時の出版社藤井孫兵衛さんが発刊したものです。天井画167図のうち100図が木版摺りで、全四冊で発行されています。

近藤徳太郎さんは、フランス勸業留学生の1人で帰国後、明治17年殖産設備の京都府織殿に勤め、その後、川島織物の皇居造宮織物の制作に関わり繊維技術の発展に大きな功績を残しました。

当時、若冲の花鳥画が図案参考に使えると思い先見の明で企画制作されたのでしょうか。こちらでも藤井孫兵衛さんが何らかの理由で木版出版を辞められたとき、版権が移動し明治42年に弊社版として発行しています。版木は桜の木を使用しています。その理由は、桜は沢山植生していたこと、乾燥時の縮みや反りが少なく、丈夫で磨耗に堪えられるという特性があるからです。当時から板は非常に貴重であったために、裏表に彫っています。

ここに明治時代の板がありますが、削られて薄くなっています。色が違うのは貼り合わせてあるからです。当時の職人は継ぎ木をして使いました。このように、使われない版木は表面を削り別図に彫りなおされるので、出版物は比較的残っていますが、浮世絵などの版木は残っていないのが現状です。百年前の板で薄くなっても摺る事が可能な間は現役の版木です。現在は桜の板が手に入りにくいので合板になり表面にのみ桜の板がはってあります。合板は、板がはがれやすいため百年先まで残らないかもしれません。

全四巻の『若冲画譜』ですが、1図につき5~7枚の板を使います。これが100図あります。100図を各100枚印刷するには手間隙と費用がかかるため、木版本として再版する事は困難になっています。



『玄圃瑤華』拓版本の再現に挑む

現在、70代の摺師さんが丁稚奉公時代に、親方がこの版を使って拓版摺りをしていました。それを横で見ていたようで、この版木を使った拓版画の作り方を憶えておられたので依頼しました。

実際の制作工程は、以下の通りです。

版木は6図が横1面に彫られている版です。1回の摺りで6図が摺り上がります。

まず版木に布海苔（ふのり）をませた水を刷毛で引き、紙を乗せます。水だけを使うと、はがすときに紙が板にくっつき破れてしまうからです。それから気泡を抜くために紙が破れないよう布をかけてトントンと叩いていきます。気泡を抜き、板と紙が密着するように小さな気泡も抜いて貼り合わせます。するとほぼ真空状態になり、板を彫ったところに紙が密着した状態になります。このままでは水分を含んでいるため墨がにじまないように1日寝かせます。翌日、生乾きの状態で、タンポでしみ込ませた墨をゆっくりと叩きます。

この墨の混ぜ具合で色が変わってしまいます。叩き過ぎると紙が破れてしまい、墨が少ないときれいに載らない、水分を含ませすぎるとにじんでしまいます。江戸時代のように深い黒を出す事に苦労しました。

紙も木版画用の和紙では厚過ぎて板に密着しないため、ある程度薄くて丈夫な紙が必要でした。最終的に画仙紙を用い再現しました。しかし、初版とは色がまったく違います。最初はムラが多く出てしまいます。黒くなるころまでは再現してもらいました。一日寝かせると2日間で6枚しかできません。100枚作ろうとしたら大変時間がかかります。

弊社は戦前と戦後に1回ずつ再現しています。戦後版は約30冊しか商品として完成しなかったようです。それに当時は個性が強すぎて着物の柄としては通用しなかったようで、あまり売れなかったそうです。江戸の初版は私家版として作られましたが、恐らく多大な費用をかけて制作したと思われます。商品として制作している身としては非常に興味深いです。

現在も人気の若冲柄

現在では木版本としては手間と時間、コストや販売価格の問題から木版本としては再現できないのが現状です。インテリア用に1図ずつ額装品として木版摺りで再現したり、オフセット印刷の本として出版し、書店に置いています。おかげでさまざまな業種の人に若冲の絵を知ってもらえることができました。

この図案は漆器、百貨店のポスター、茶箱、暖簾、浴衣の柄などにも転用され、再び京都の工芸品の図案に応用され現在も、若冲柄は注目を集めています。



質疑応答

Q 著作権は誰が持っているのか？

A 著作権と版權は違います。ちなみに若冲の著作権は切れています。

版權とは本来、その図が彫られた板が版權でした。そのため何らかの事情で板がほかの出版社に行くと「版權が移譲する」と言いました。昔はデータがないので、板を持つところに権利がありました。摺り物は複数できますから木版画は沢山の方が持っておられますが、出版社は版を持っていることから「版權を持っています」と言いました。ただ芸艸堂に版權が移る前の摺り物については、弊社が作ったものではありません。

弊社は、もともと染織の図案家さん達に向けて、柄を使ってもらう目的で作っていました。著作権フリーとはまた少し意味合いが違います。当時そのまま図を使う人はいませんでした。若冲という名前は出さず、図案の中に若冲の花の絵を色やデザインを変えて使っておられました。昔は、互いに顔が見える関係の中で暗黙の了解がありましたが、作家の名前が有名になると、知らない所で図版をそのまま使い「自社のオリジナルです」と出されたりすることもあり、使うときには声をかけてくださいと言っています。

Q 拓版画の色について、色が濃い状態で出ているように見えますが...

A 胡粉をひいてそこに絵の具を載せると深味が出てきます。油絵などもまず朱をひいてから青を載せると深みがでますが、木版画も同じように摺り師さんが様々な工夫をされています。芸艸堂での戦前の版を見ると胡粉が下にひいてあるような感じで深味があります。研究書には「鳩居堂の最高級の墨を使ったのでは」と書かれています。

数年前にBSNHKが若冲の特集を組み、墨をテーマにした放映の際、奈良在住の墨の研究者と一緒に弊社に取材に来られました。その際、墨の研究者の調合した墨で摺ってみましたが、仕上がりは同じでした。墨の質の良さと摺り師さんの混ぜ方の技が関係しているようです。

Q (拓) 版画ができたのはいつごろからですか？

A 木版技術は平安時代に仏教の伝来とともに伝わりました。拓版技術も中国から伝わった技術です。芸艸堂でも明治期は拓版摺りの本を出版していたようですが、摺り師は自分の技術を他者に教えませんでした。難しい仕事を先輩や親方の仕事を横で見ながら学んだものですが、現在はそれほどの仕事量がありません。

同じ版画でも浮世絵と若冲の版画とは作り方が違います。浮世絵師・葛飾北斎(1760-1849)の浮世絵などは、東京の摺り師が得意としています。

浮世絵の場合、たとえば版元が浮世絵師に「富士山を題材に連作の風景画を作ってよ」と企画提案し、浮世絵師は企画にそって絵を描きます。目的は一般の人を買ってもらうことです。制作コストを抑えるために、色数を制限した中で色数が多いように見せる技術が発展しました。一方、若冲など日本画家の絵は版画用に描かれた作品ではありません。これを木版画用に板数を分けて作っています。板の数や制限はなく、摺り師も原画に近い状態に摺るため、様々な工夫をしています。京都の場合は様々な種類の仕事をしている職人が多いので、浮世絵から日本画の複製まで摺る事ができたのです。版元が多種多様な仕事を発注することで摺り師が育っていくのです。

Q 版木を見せていただきました。鋭利な刃物で掘り込んでありますね。彫師の仕事ですか？

A 彫師の仕事です。木版画の工程は彫・摺りと分業です。現役の職人の中には、若者や女性が伝統工芸に興味を持ち摺り師を目指すというケースもあります。職人の世界は難しく腕がよくなないと仕事が来ませんが、腕を上げるためにはいろいろな仕事を経験しなければなりません。しかし、現状では版元が減っており仕事の経験を積むことが難しくなっています。昔はお菓子の包装紙なども木版摺りで制作していました。かけ紙や料紙などは機械印刷するとインクの匂いがするので、木版摺りが好まれました。木版摺りで何万枚という単位で注文があったのです。若手はこういった仕事を通じ絵の具の調合や配分を覚えていきます。若手に簡単な仕事を任せて、着物の図案など難しい摺りは親方が手掛けするという流れがありました。観賞用の版画の場合、若い摺り師にはいきなりできないのでベテランの60、70代の人をお願いします。若手に仕事の経験を積んでもらうためにポストカードなどの企画をして腕を磨いてもらったりします。